

「それはお疲れさまでしたね」

一乗寺賢は黒革のライダースジャケットの前を開いてやつとくつろげたようだった。

「まあなあ。そっちも警察のお偉方に引き合わされて大変だったって聞いたぞ」
太一が京をちらっとみる。

「おかげで就職活動はしなくてよくなったみたいですけどね」
京が賢の代わりに答えた。

「えっと、それは。でも、上の方の人とはほんとに最初の一回だけで、その後は直接の上司になる予定の人とだけですから」

「予定、か。デジモン犯罪捜査課」

「まだこれから新設されるので、仮称ですよ」

「ほんとに作るんだなあ。まあこれからは必要になるのは確かだけど」

「政府だか警察だかもそれなりにデジモンのこと調べてるのよねえ」

京は、デジモンだけではなく自分たちのことも、とは言わないでおいた。

「賢に目をつけるのもなるほどってカンジするし」

デジモンを悪事に使うことを最も忌諱しているのが賢だ。かつての自分がしたような過ちを他の人達にさせたくない。もしそういう行動に出る人がいたとしても、できるだけ早いうちに収めてしまいたい。その気持ちはこの仲間の中でおそらく一番強い。

「たぶん、ステイングモンがあまり大きすぎないことが、捜査に向いてると思われたんだと思うよ」

賢を選んだ側は誰のデジモンが進化するとどれくらいの大きさに成るかまで把握してるということだ。

「謙遜するわよねえ」

太一はやや居心地が悪くなってきた。

「まあ町なかでいきなり大きな成熟期が活動するわけいかないなあ」

「あの、ところで」

賢は何とか話題を変えようとする。

「光子郎さんたち、遅いですね」

「城戸シンさんからの知らせをあちこちに回して回るだけっていつてたんだけど」

あの二人はほっておくと何かのきっかけで議論を始めていつまでも終わらない。いまでもそうにちがいない。

「ちよつと呼んできますね」

京が行ってしまったので、今のうちにデジタルワールドに回線繋いでもらってワームモンの顔を見たかったという賢の希望は潰えた。

「賢ちゃんにもこれ食べてほしいなあ」

賢のパートナーデジモン、ワームモンは短い手(?)で器用に箸を操りラーメンを食べている。大きなイモムシのようなという気味悪がられそうな外見だが、愛嬌のあるくりつとした目が好感をもたらししている。

「うめえだろ。今日のだしは特製だからな」

本宮大輔は得意そうだ。

「また腕上げたよね、ダイスケ」

大輔の隣の席の犬のようにも見えるが小さな竜型の青いデジモン、ブイモンも得意そうだ。

遠くに雪をかぶった山々が見える。反対側には熱帯のような密林がある。その間の平原をまっすぐ貫く線路があるが、なにかが通るのを見たものはいない。

線路には短い支線があり、その先に風力発電のブレードがゆっくり回っている。太い電線がかなり大きな石造りの城壁のような建物に続いている。大輔たちはその中庭にいた。大輔はスタジャンにサングラスを頭の上に引っ掛けている。

デジタルワールドにいくつかある保護区のうち、北米、英語圏出身者の多いここでは食事でも欧米風に近い。主食はジャガイモやトウモロコシ、そしてパンよりも工程が少なくて済む上に保存も効くパスタ。そのパスタを利用して始めた大輔のラーメンは好評だった。いわゆる動物はこの世界で見ることはないが、川や湖に魚はいる。大輔はそれをただ調理するだけでなく出汁を上手く取ることもできるようになった。そのうちに具も増えるようになり、今日の丼の中にはキノコを炒めたものが入っていた。

「あたしのヒントも良かったでしょ」

太刀川ミミもにこやかだった。大きめのロングTシャツにデニムのベスト、ミニパンツで膝上までのブーツを履いていた。大輔同様、活動のしやすさと防御性を考慮している。

キノコはミミのアイディアだ。この世界のどのキノコが食用に適しているのか、それを判別する能力に長けてるのはミミのパートナーデジモン、パルモンだった。緑色の植物のようなパルモン本人はラーメンは食わずに中庭の中央で日光浴で光合成をしている。その横で日向ぼつこのまま眠っている白く耳の大きなデジモンがいる。テリアモンだ。テリアモンのパートナー、ウオレスは大輔たちと同じテーブルを囲んでいる。すっかり箸に慣れて器用にラーメンを食べていた。

「さっきの連絡、その、ニシジマって人のことはいいの」
大輔はちよつと困った顔をする。

「まあ、オレは会って話したことがない人だしなあ」

大輔が初めて見た西島は意識がなくベッドに横たわった姿だ。その時、そばには姫川マキと望月芽心がいた。彼らの話の中では大輔や伊織たちは行方不明ということになっていた期間がかなり長かったらしい。

ミミの立場は違った。

「わたしは会ったはことあるはず、なんだけど。なんだか曖昧で」

芽心の話ではミミや太一たちは一緒に行動していたことがある。ミミは確かに芽心に前にあつたことがあるような気はするのだが、彼女が言うような大事件に遭遇していたとしたら忘れるわけではない。

「曖昧なのはぼくと同じか」

ウォレスが口を挟んだ。ミミとは逆に、ウォレスと大輔はその前にあつたことがあるはずなのだが、それはまた十年も前の話。

「そういうなよ、ウォレス。なんか仲良くしたつてのは覚えてるんだから」

アメリカに保護区のもとになる場所を開いて間もない頃、アメリカのPHの一人マイケルの家をウォレスが訪れてきた。マイケルの父は有名な映画スターで、広大な牧場を所有してその一部を保護区としていた。それがちょうどデジタルワールドに移転した後だった。ウォレスが昔会ったことがあるというので大輔が呼び出された。

「あんどき、初めて会ったつて気はしなかったもんなあ」

だが彼のいう、一緒にした冒険のことははっきりとは記憶にない。アメリカを舞台に大輔たちとの旅や強大なデジモンとの戦いもなんとなく覚えてるような気はするのだが。それは京や伊織たちも同様だった。

「オレも、マグナモンになったとき、初めてじゃない気がしたよ」

ブイモンもそういう。だがそれ以外の記憶が曖昧なのだ。そもそもその頃はデジタルワールドでデジモンカイザーとの決着をつけてた頃。その前後のいつにアメリカまで行ったのか。それもゲートでなく、わざわざ飛行機で。

「わたしもちっちゃくなつた記憶があるような気もしなくはないけど」

ミミや太一たちはその時にウォレスに会ってはいない。代わりに幼く戻されてたという。そのせいであまりよく覚えていないのか、それともそれが本当の記憶なのか、そうでないのか。ウォレスも別世界から来た可能性があると光子郎が言っていた。彼がこの世界に来たときにもたらされた元の世界の大輔たちの記憶までが一緒に移ってきたのかも、と。

「それが記憶のすれ違いの最初の例だったわけ？」

研究所の一室で光子郎とメノアは立ったまま話していた。

「ウオレスの例、メイたちの例、わたし。そして今度のルイ、ね」

「一乗寺くんから聞いただけの例もありますよ」

「あれが一番謎、というか、少しシチュエーションが違いすぎるわ」

「記憶のことはその前にもう一件あります」

一九九五年光が丘で大きな爆発が起きた。ガス漏洩による事故として処理されたが、実際はグレイモンとパロットモンの争いによるものだった。太一たち八人はそれを目撃していた。にも関わらず、そのことはすっかり忘れていて、四年後光が丘を再訪、東京に侵攻しようとしていたデジモンとの戦いの際に思い出した。最初の事件のことを忘れていたのは自分たちが小さかったからなのかとその時は思っていたが。

「大きな事件や怖い目に合うと、その記憶を自分で封印してしまうというのには割にあることだそうですね。心を守るため。光が丘のこともそういうことと思っただけですが、その後の例との関連も考え直してみたほうが良さそうですね」

「記憶の封印と、記憶のすれ違いは質が違うように思うけど」

「メノアさんたちの場合は記憶のすれ違いなのか」

「別世界から来たのか。そこは前から言ってることよね」

「ぼくたちが別世界に行ったという記憶の例もあるし」

「それもこの世界の時系列でどこに入れたらいいのかわからないものなんですよ、これが済んだら一度整理してみなくちゃね」

「記憶の問題と言ってるけど、情報系の問題と絡んでるはずなんです」

「イジーが気にしてる、デジモンとは何か、どうして別世界のものがこの世界で質量を持ち、『進化』の際にそれが増減できるのか」

「メノアさんの研究、デジタルワールドはただの別世界なのか、というのと根本

は同じはずなんです」

「ルイが来たことでふり返しちゃったわねえ」

「西島さんが意識取り戻したのも偶然じゃないのかも」

ドアが開いて京が飛び込んできた。

「あくもうやっぱり。いつまで話してるんですか、連絡終わったんでしょ。賢も来てますよ」

応接室に戻る廊下でも光子郎とメノアはまだ話を止めない。

並行世界や別宇宙は存在するのか。するとしたらどこに、どのように、という問いに対する答えにこんなものがある。

「光子郎さんの言ってたことを、ぼくなりに理解できたところまで、という前提で。文系が理解するには限度あるからね」

長い車の移動の途中、休憩で入った道の駅の食堂で、タケルはルイに光子郎の仮定を話し始めていた。シュウは運転席で仮眠している。

「物質を構成する原子。あるいはその原子を構成する原子核と電子。その大きさは漠然とイメージするよりも相当に小さい。太陽と地球の間の距離に野球ボールとゴマ粒おいたと考えてみて。正しい比率じゃないけどイメージできる分としてはそのほうが近いらしい」

タケルは自分の前に置かれた胡麻団子から胡麻を二粒取り、テーブルの両端においた。

「これよりもっと離れてる」

それだけの距離が離れても一つの原子であると振る舞えるのは、物理学ではいろいろな名前をつけているが、要はそこに約束事。契約のようなものが取り交わされているから。実際はその間に別の素粒子が入り込んできても契約がなければ別に作用されない。

「でももしその間に実はたくさんさんのゴマ粒があつたら」

胡麻団子の皿を二つのごま粒の間に置いた。

「この皿がもつとたくさん」

びっしり埋めるとそれこそ無限と言つてもいい位の数になってしまう。それぞれが別の約束事で結びついていていたら、それこそが別宇宙なのではないか。原子の約束事とその矛先を隣り合った素粒子のどれかに変えることができたなら、別の原子になることもできるかもしれない。その約束をこの世界に留めているのは情報だけだ。ある程度まとまった量がその情報系を隣のものに書き換えたら。

「たくさんのゴマ粒を結びつけていた糸を、別のゴマ粒に通してみるというようなことかな。それが別世界に行くということなのかもしれない」

ルイは突然の話に上手くついていけない。タケルはかまわず続ける。

「この話の面白いところは、デジモンたちが何故この、僕らの世界で体を持つことが出来るかを説明できそうなどころなんだ」

次元が違うとか別世界とかの遠そうなどころではなく、この空間にあるのにと認識されてないたくさんの素粒子。それに情報を与えて、こちらの世界で認識出来るようにすれば。

「そこになかった質量が出現することになる」

タケルは爪楊枝を胡麻団子に刺した。

「え、それはもしかして、デジモンの進化も」

「そう。わかりが早いね。デジモンたちは進化するときには大きさもかなり変化する事が多い。元の質量の何十倍にもなることも。それを何処から持ってくるよ
りも」

爪楊枝を刺した胡麻団子を持ち上げる。

「ここにあるけど認識されてないゴマ粒に糸をとおして、こちらの世界に借りてくるほうが早い。ほんとはそこにダークマターとか、ダークエネルギーとか、量子論とか弦の振動とかも絡む話らしいけど、ぼくにわかりそうなのはここまで」

光子郎はこの質量の問題に意識、記憶も関係してるのではと考えているようだった。

タケルはタケルで、九五年に光が丘で事件を目撃した子どもたちの内、数年後にお台場に引っ越したものがデジタルワールドに呼ばれたのか、デジタルワールドに呼ばれることになっていたからお台場に引っ越すことになったのか。その因果関係についての疑問も持っていた。それは光子郎の興味の範囲から外れているので、自分でいつか解決すべきものだろうとも思っている。運命とかあるいは神の存在にも関わることもかもしれない。

「そのうちもつと。いろいろわかるようになるといいなあ」

「あの時のヤマト先輩、よかったですよー。

今にも自分が殴りかかっていきそうで」

京が話しているのは前夜、この光子郎の研究所にルイが現れて話したことを後で聞いたヤマトのことだ。

「俺たちとデジモンの結びつきの始まりが、そんないい加減なことがきっかけだったのか。ふざけたことを。太一がジュネーブに行ってる間で良かったな。あいつがいたらただじゃすまなかつたぞ、とかってもう大変で」

「ヤマトは何でもオレのせいにしたがるの良くないよなあ」
太一はやれやれと受けながす。

賢も来たので太一、光子郎、メノア、京で前日のことを最初からおさらいして
いた。

「もう一つ大事なことがあるでしょ」

そこまですつと聞いてるだけだったメノアが話した。

「ルイと、私。それにモチヅキメイも」

太一はメノアをまっすぐ見ている。

「パートナーデジモンと出会ったのはデジタルワールドじゃない、ってこと」

太一たちや、大輔たちはほとんどデジタルワールドへ行ってからそれぞれの

パートナーデジモンと出会っている。ヒカリという例外はあるにせよ。ベリアルヴァンデモンを倒した後にパートナーと出会えた、暗黒の種を植え付けられていた子どもたちも、その出会いはデジタルワールドでだった。

「二〇〇三年以降はそういう例も少しずつ増えてきてますけどね」

光子郎はタブレットのカバーを閉じた。

「遡ると大輔たちと二〇〇二年の夏に冒険をしたというウォレスもたしかそうです。出会いはデジタルワールドじゃない」

「なにか意味があるのかなあ、そういう別世界にいたかもしれないPHが現れてくるのは」

「しかもみな、現状ではパートナーデジモンを失っています」

芽心、メノア、ルイ。彼らのパートナーデジモンは今はいない。彼らの記憶ではそれらは太一や大輔たちが倒したものであるということになっている。

やはりずっと聞いていた賢が光子郎に向いた。

「ところで、さっきの仮説。ルイくんの年齢とか記憶に関すること。随分デリケートな話だとおもうんですが、ルイくん本人には」

「ああそれが」

答えかける光子郎を京とメノアが椅子から立ち上がらんばかりの勢いで遮った。

「所長本人が言うのは全力で止めました！」

「イジーに言わせちゃ台無しよそんな話！」

「じゃあぼくがゆっくり話ししてくるよ、ってタケルくんが言って」

「それで突然東北まで行くことになったのよ」

「そういうことだったのかあ」

太一はまた頭の後ろに手を組んだ。今日何度目だ、この姿勢、と思いながら。

「そんなにぼくが話すのは良くないでしょうか」

光子郎はいまいち納得できてない。

「まあそれがわかってないのがイジの良いところでもあるんだけどねえ」

「ミミさんも前にそんなこと言ってましたよ」

よくこの研究所はうまく運営できてるもんだな、と太一は関心していた。

「丈、重くない？おいら自分で歩けるよ」

「大丈夫だよ、小学生の時でもちやんと持ち歩けたんだから」

何か事故があつたようで電車が止まってしまい、城戸丈はゴマモンの入った鞆を肩から下げたまま海沿いの道を歩いていった。

「やっぱり暗くなる前には着けそうもないなあ」

太陽はかなり低くなつてきていた。

「京くん、ゲート開いてもらえますか。そろそろテントモンにこちらに来てもらいます」

応接室でタブレットを見ていた光子郎が顔を上げた。

「前兆来てます？」

「まだすぐというわけでもなさそうですが」

その目に緊張が走ってるのが太一にはわかる。

「どの辺に来そうなんだ？」

「この研究所近くと、保護区のうち二つ。空さんたちの九龍城寨とミミさんたちのアラモ砦。他に反応小さいですが神奈川の療養所と、もう一つは。福島あたりを移動中で計五箇所か」

「そんないっぺんに」

京が眉をひそめた。

現実世界でデジモンが活動するとデジタル機器に障害をもたらす現象がある。成長期までならそれほど支障は無い。成熟期デジモンがなにかしらの技を放つと周辺に影響し始め、完全体以上では存在するだけでノイズを撒き散らす場合がある。そのノイズの周波数はある程度特定できてきた。それを観測することで遠隔地からでもデジモンの存在を検知することが可能になりつつあった。この研究所の研究課題の一つだ。

デジタルワールドではある種のデジモンたちのみの検知が試みられていた。観測は各地域の友好的なデジモンと、ゲンナイたちエージェントを通じて「デジタルワールドの安定を望む意志」ホメオスタシス」との連携でネットワークを構築中。テントモンはその中心にいた。

デジタルワールドとこちらの世界、両方におそらくは悪意のあるデジモンの出現が感知されている。しかも同時に複数箇所。

「こちらの力を分散させようってことだ。結構本気だな」

太一の言葉を聞き終わる前にメノアが立ち上がり、研究室へ向かった。

「システム立ち上げて準備しておくわ」

「おれもあっちに行かなくちゃだ」

「ぼくも行きます」

賢も立ち上がった。

「じゃあ大輔の方へ行ってくれ。ここは」

「多分私たちだけで大丈夫です」

光子郎のタブレットのデータを一目見て勢力状況を判断した京が、D3をモニタに向けながら言った。応接室の隅にあるその液晶画面にもやもやとした光が出現。強く発光してゲートが開いた。

道の駅の駐車場外側に森が見える。うす暗くなってきた奥に何かあるかわからないそこに、何かがうごめいていた。音で近づいてくるのがわかる。普通の人間の大きさではなさそうだ。

城戸シュウが運転席からノートパソコンを差し出した。

「起動したよ」

「ありがとうございます！」

タケルがそのモニタにD3をかざした。

「デジタルゲートオープン！」

モニタにもやもやとした光が現れる。そのパソコンをタケルが受け取り、駐車場の開けた空間へ向けた。光が外へ大きく広がる。森から黒いデジモンが飛び出してきたのとほぼ同時だった。光の中から現れたガルモンがその黒いデジモンを一撃で跳ねのけた。光から続いて出てきたのはヤマトだ。

「間に合ったな」

「ぎりぎりだけどね」

タケルが答えてる間に光から伊織、アルマジモンが出てきた。

「ここは僕たちで止めます」

「早く出発するだぎゃ」

「頼んだよ！」

「スマホはちゃんと充電しておけよ」

「わかってるって」

ヤマトに答えつつドアを閉めるタケルを乗せた車は東京方面へ走り出した。ガ
ルルモンが弾き飛ばしたデジモンの奥の森から、さらに数体の大きな黒いデジモ
ンが現れて道路に乗ろうとしている。

「遠慮はいらぬぞ、伊織」

「わかってます」

伊織はD3をかざし、アルマジモンが進化の光を発した。

夕陽が射す岸壁を背に、白衣がひるがえった。丈が慣れた様子で腕を通す。

「まだそれ着るには早いんじゃない？」

丈の足元はふわふわに見える長い白い毛におおわれたイッカクモンだ。すでに海上で、療養所へ向かっていた。

「いや、気分だよ気分！」

丈の左手はイッカクモンの角を掴んでいる。その白衣は防刃撥水性能も備えている特注品だ。その分重いが、海風もしのげる。いつ何が起きてもいいようにと普段から用意していた。白衣とゴマモンを入れてあった鞆は肩紐をイッカクモンの角に引っ掛けてあった。

「急がなきゃ！」

「しっかりつかまっててよ！」

イッカクモンは速度を上げる。左右に飛沫が大きく上がった。

デジタルワールド、保護区《九龍城寨》のすぐ近くに目立たない入り口があり、地下五階の堅牢な施設がある。普段の生活をするには向かないが、シェルターとしては使える。この施設があることも保護区として選定した一因だった。その地下二階の頑丈な扉をヒカリが閉めかけていた。

「中はお願いね」

扉の向こうには子どもたちの世話をしている望月芽心がいた。

「ええ、ここは大丈夫です。お気をつけて」

「ありがとう」

ヒカリは扉を閉めた。重いハンドルを下ろす。

「これでよし、と」

安心した途端、頭の中に激痛が走った。

地上への入り口の狭い隙間から、黒い瘴気のような闇が流れ込んできた。悪意そのもののようなものだ。通常の人間に見えるわけではない。触れるほどの距離にいても何も感じない人も多いだろう。だがヒカリの精神に効果をもたらすには十分だった。うずくまりかけた。

下の階から白い猫のようなデジモンが飛ぶような速さで登ってきた。ヒカリの異常を感知したテイルモンだ。聖なる力を込めたパンチの一撃で闇を散らす。

「ヒカリ！」

「大丈夫。ちよつと油断した」

とりあえず地上に出て日差しのもとで呼吸を整える。

武之内空と、ピンク色の鳥型のパートナーデジモン、ピヨモンが来た。

「思ったより相手の数が多いみたいです。それだけじゃなくて」

「ただのデジモンの気配ではないものが瘴気の奥から感じられた。」

「光子郎くんの予想通りね。いつかはくると思ってたけど」

《九龍城寨》からニャロモンを抱いた川田範子が走ってきた。

「空さん、終わりました」

二〇〇三年最初にPHになった、暗黒の種子を植えられていた子どもたちの一人だ。今はこの保護区に交代制で子どもたちの世話をしている。彼女は建物内あちこちの緊急時のシャッターを下ろしたかどうか確認していた。

「ありがとう。あなたはここに入ってきて」

「それと、南から黒いものが近づいてるそうです」

「わたしが様子みてくる。ヒカリさんは」

「研究所に戻って、兄たちと交代です」

範子が地下への入り口を閉めるのを見ながら二人は走り始めた。

「じゃあ、がんばって！」

「そちらも気をつけて！」

ヒカリとテイルモンが《九龍城寨》へ向かい、空はピヨモンが進化した巨大な炎の鳥、バードラモンの足にリフトのように腰掛けた。真つ赤な翼が羽ばたき上昇していった。

「太一さん、これを」

「こないだ言ってたやつか」

「ちようど間に合いました」

「タケルたちも間に合うといいけどなあ。とにかく行ってくる」

光子郎からゴーグルを受け取った太一は、研究所内のゲートからデジタルワールドへ向かった。

「ちゃんと気をつけておきます」

タケルは城戸シユウの車内のチャージャーでスマホの充電している。

「まあパソコンの方がいきなりガルルモンが飛び出すのによさそうだったよね」

タケルが助手席に座ってるのでやや手持ち無沙汰になったルイは自分のデジヴァイスを見ていた。見た目は太一たちのものより旧式に見える。タケルのもつD3のような外見ではなく、ゲートを開く機能もない。そもそも本当に機能するのか。光子郎の研究施設でもそれが本当にデジヴァイスか、外観を似せた別のものなのかはすぐには判断がつかなかった。

デジヴァイスの機能の一つに、それを持ってない人間はデジタルワールドに長くとどまることができないということとは次第にはつきりしてきた。軍や犯罪組織などの人間がたまたまPHの通ったゲートを通じて無理にデジタルゲートに侵入した例があったせいだ。

デジモンを上手く利用しようとして入った彼らはしばらくすると調子を崩していった。それだけでなく凶悪なデジモンに襲われた際、通常の銃火器では役に立たない。デジタルワールドで生活するのにパートナーデジモンは必須だ。そしてデジヴァイスも。運良く人間世界に帰れたものがその失敗を報告した。またある人間が受け取ったデジヴァイスは他の人間が持つても機能することはほとんどないこともわかってきた。貸し借りや強奪も無効ということだ。

ルイのデジヴァイスがデジタルワールドで機能する確証がない以上、移動にデジタルゲートは使えない。人間世界の通常の手段を取るしかなかった。

車は東京へ近づいていた。対向車線をバイクが通り過ぎる。そのあとに来た二台の車がUターンして、シュウの車を前後から挟んだ。

療養所への坂道を白い巨体が爆走している。イツカクモンだ。長い階段で揺れが激しい。丈は振り落とされないうイツカクモンのツノにしつかりとしがみついていた。少し見えてきた療養所を囲む林の向こうに黒い影が揺れる。大きめのデジモンたちのようだ。丈が飛び降り、イツカクモンも進化を解除、ゴマモンに戻って療養所の玄関に飛び込んだ。

診察室前を抜けて病室の廊下。その先は食堂と面会室を兼ねたりリビングルームで、奥は一面ガラスのアルミサッシ。外の芝生の向こうはすべて林。そこから黒いデジモンたちが今にも襲ってこようとしている。廊下で病室の開けた扉から恐る恐る奥を見ているのは姫川マキだ。その先に丈の兄、シンの後ろ姿。丈が声をかけながら横を駆け抜ける。

「シン兄さん、大丈夫」

ここはぼくたちが、という前に驚いて立ち止まった。林にいるデジモンたちはとつづくにこの室内まで入ってきたはずだった。それを押し留めているものがないければ。

「アルケニモン」

人より巨大な蜘蛛のようなデジモンが部屋の真ん中で外に向いている。それが人型の上半身を持ち上げた。丈の声を聞いて、そのデジモンの手前の看護師が振り向いた。

「私のコドちゃんが、いきなりこうなっちゃったんです！」

本宮ジュンのパートナーデジモンが、コドクグモンであることは丈も知っていた。それが進化した姿がこのアルケニモンなのか。それなら害はないはず。襲ってくるデジモンからジュンを守るために進化したのだから。

林のデジモンたちがこちらへ動き始めた。アルケニモンが構える。ゴマモンも進化させるべきだが、すでに部屋はアルケニモン一体でいっぱい、イツカクモンが出現する余地はない。

「丈、そつちを」

言いながらシンがガラス戸の右端へ走った。丈は左端へ走り、二人で同時にガラス戸を開け放った。アルケニモンが外へ飛び出し、その後を追うようにゴマモンが進化する光が迸った。

NGO団体DMH

代表理事 高石奈津子

主な業務は人間世界とデジタルワールドの関係を良好に進めること。パートナーデジモンを持つ人間、PH（パートナーヒューマン）の安全を守ること、など。八神太一はこの団体の職員となっている。ヤマトと伊織はこの事務所からゲートを通して一度デジタルワールドへ向かい、再度シュウのパソコンにゲートを開いて出撃していった。その操作を手伝った川田範子の他にもボランティアの大学生たちが多く出入りしており、保護区での活動を交代でしている。

彼女と同じように二〇〇三年初めにPHとなった吉沢孝、芝田浩はそれぞれのパートナーデジモンを伴ってシュウの車を挟む二台の車を運転していた。光子郎の研究所に着くまでの護衛だ。戦いの経験は少ないが、これくらいなら役に立てるはず、と志望してきた。

もう一人、バイクに乗っていたのも同じグループの倉田けい子で、ヤマトたちのいる道の駅の外に着いた。黒いデジモンたちとの戦いが終わったところだ。

「おまたせしました」

ゲートを使った移動は便利な面が多いが、デメリットもある。行った先から戻る際、その場にちようにいいパソコンなどがなく、すぐにはゲートが開けない。自分が持っているスマホをゲート用に使うとそれをその場に残すことになってしまふ、など。彼女はゲート用のスマホを持ってきたのだった。

「デジタルゲートオープン」

伊織がD3を向けるとスマホ画面にゲートが開いた。

「デジタルワールドで太一さんと合流してください」

「丈の方はいいの？」

「今のところ、あちらは手が足りてるみたいですよ」

「そうなんだ。じゃ」

ヤマトたちがゲートへ入るのを見届けて、倉田のバイクは東京へ走り出した。

「京さんたち、集まらりましたで」

泉研究所の研究室、光子郎のいる部屋に人の頭より大きなてんとう虫型のデジモン、テントモンが飛んできた。

「屋上に案内しておきました。わてらの出番はまだでっか」

「タケルくんたちが着いてからですよ。それに、段階がまだです。もう少し休んでください」

「後からたっぷり働かされる、ちゅうことでんな。楽しみしてますわ」

システムモニターに向いていたメノアがそちらを見て、ちよつとだけ羨ましそうに微笑んだが光子郎たちは気づかなかった。

地変線の奥に黒い竜巻が立ち上り、うねりながら横倒しになった。こちらに向かつてきている。巨大な蛇かムカデのようにも見える。近づくにつれその竜巻を構成している粒のようなのが、大小さまざまな歯車であることもわかってくる。その直撃を喰らうだけでも大変なダメージとなるだろう。それだけでなく、最も小さな一つでもデジモンの体に入り込むと意志を奪われ、邪悪の走狗と化する。

「また古い手を使ってきたわね」

飛翔するバードラモンの足に乗った武之内空は、以前ピヨモンが言っていたことを思い出していた。

「ずっと思ってたの。『メテオウイング』っていいながら、飛んでいくのは翼じゃなくてメテオの方でしょ。たまにはウイングが主体になってもいいんじゃないかしら」

デジタルワールドの高原に唐突に突き出た岩場。手前からバードラモンが上昇し、その足元から武之内空が飛び降りる。着地しながら叫んだ。

「やっつて！ あれを」

歯車の竜巻に正面から近づくバードラモンの全身が赤熱化していた。空が近くにいるときには制御していた力を解き放ったのだ。炎の羽を手裏剣のように放つのがメテオウイングだが、今は飛ばさない。目を前に向けたまま全身を大きく捻った。大きな赤いドリルのように竜巻に突っ込む。歯車はその回転に蹴散らされ、高熱で変質し、砕け散る。巨大なムカデのような竜巻が粉碎され尽くすまで二十秒もかからなかった。

「誰がここにアラモって名前つけたんだっけ」

ミミたちのいる石造りの巨大な館。同じく石造りの外壁の六つの角に塔があり、その一つに立つマイケルが見渡しながら言った。別の塔にいるステイブの声が通信機から聞こえてきた。

「君んちのパパじゃなかったか、昔そんな映画撮ったとかで」

「あれえ、そうだったか。なんか別のにさせるべきだったなあ」

マイケルの父は映画スターだ。この保護区に移転する前は彼が所有している広大な敷地の牧場の一部が救出した子どもたちの避難所だった。彼自身はデジタルワールドに來たことはないが、移転先の画像を見た時に自分が出演した映画のアラモ砦に似てるな、と言ったのだった。

「まあ一部だけ見れば砦っぽくもあるけどさ。どっちかといえれば城なんだから。

第一、イメージ悪くない？」

「まあ気にすんなよ」

「僕たちが全滅するわけないだろ」

通信機からサム、ルーの声が聞こえてきた。彼らは皆ミミたちとほぼ同世代のアメリカのパートナーヒューマンだ。

「無駄口叩いてないで」

「そろそろ次が来るわよ」

同じ仲間のマリア、テータムの声も飛んできた。

外壁の外では先に襲来した黒い歯車の群れをミミのパートナーデジモン、パルモンが進化した大きなサボテンのようなトゲモン一体で撃破した。その後、地面のあちらこちらから黒いケーブルが湧き出し、四方からアラモに向かってきた。そのケーブルもデジモンの体に接触すると意志を剥奪する。それが何百本も襲ってきたのだが、マイケルたちのパートナーデジモンがその全てを破壊し終わるところだった。

「よし、全員一時撤収！ Aチームと交代だ」

外壁の正門が開き、デジモンたちが引き返すのと入れ替わりに三十人ほどのパートナーヒューマンがそれぞれのデジモンと共に外に出た。ケープルの残骸はすでにチリとなり消え去っている。荒野の前にある岩場の上に大輔、賢、そしてブイモンとワームモンが立つ。

「みんなのデジモンの力を借りる時が来たぜ！」

「大丈夫だ、ちゃんと無事に返す。約束する！」

荒野の向こうから黒いトゲのようなものが生えてきた。巨木ほどの大きさがあ
る先細りの細長い四角柱。頂点だけが鋭く尖っている。進化を阻害する力を持つ
黒いオベリスク、ダークタワーだ。周囲のデジモンは成長期以上に進化することが
できなくなる。その黒い柱の群れが奥から順に伸びてきて、砦に迫ってきた。

東京湾にもダークタワーが何本も立っている。前後を二台の車に守られた城戸シュウの車が芝浦の泉研究所前に急停車した。玄関からパタモンが飛び出してきた。

「タケル~~~~！」

「パタモン！ 待たせたね」

玄関の中には光子郎とテントモンが待っていた。

「早く、ゲートへ。君は」

光子郎はルイを応接室まで案内した。

「少し待っていてください」

その間に研究室のパソコンモニタに京が開いたゲートからタケルとパタモン、城戸シュウがデジタルワールドへ向かった。

二〇〇二年、小学五年生になったタケルがお台場に引っ越した頃。日本ではまだ公衆無線LANが一般的ではなかった。

町なかに無線通信網を張りめぐらせる実験地域としてお台場を中心とした一帯が選ばれ、通話機能がなく、主に電子メール用として使える当時の携帯電話よりやや大きめの端末が小学生とその家族などに配布された。

それはライターミナルと呼ばれた。

本来それほど高性能なものでもなかったが、通常の携帯電話よりはメモリーが大型だったため記憶媒体としてかなり使えた。

元宮大輔たちがパートナーデジモンと出会った時、彼らのデジヴァイス、D3がそのライターミナルと接続し、紋章の力を宿したデジメンタルのデータを保管することができた。この端末のおかげでデジメンタルのデータを複数持つこともでき、その力を使ったアーマー進化も可能となっていた。

その代わりアーマー進化にはデジヴァイスとディーターミナル二つが揃わなければならぬというデメリットもあったのだが、デジヴァイスと違い人間の作った工業製品だったディーターミナルの機能はその後のスマートフォンで十分代用できるものだった。大輔たちも今はスマートフォンをディーターミナルの代わりに行っている。スマートフォンの普及とともに、増大するパートナーヒューマンの中にアーマー進化可能なデジモンをパートナーに持つ子供たちも出てきた。保護区にいる中にいる彼らは、アーマー進化チーム、略してAチームと呼ばれた。

大輔が大きく叫んだ。

「よっしゃあ！ Aチーム、出動だー！」

アラモ砦前にいたPHたちのデジモンが一斉にアーマー進化した。アーマー進化はダークタワーの影響を受けない。大輔のパートナーデジモン、ブイモンも青い四足獣型のデジモン、ライドラモンとなった。元々は小学生の大輔一人を乗せるのがやっとくらいの大きさだったものが、いまはその二倍はありそうだ。

「行くぜー！ー！」

大輔を乗せてライドラモンが走る。陸上を走るタイプのアーマー型デジモン群がその後につづく。地響きを立てて林立するダークタワーへ突進していった。

「ぼくたちも行くぞ！」

岩の上に立つ一乗寺賢の後ろから飛翔タイプのアーマー型デジモン群が飛び立った。先頭はプッチーモン。ワームモンが進化した、白い体に赤い大きな耳のようなものがついた被り物をした妖精型のデジモンだ。戦闘能力は低いですが、ダークタワーの群れの中に取り残され、あるいは撃破し損ねた黒い歯車に取り憑かれたデジモンを発見し、すばやく歯車を取り外す。あとから来たアーマー型デジモンたちがダークタワーを容赦なく粉碎していった。

「今です、みなさん」

伊織の乗る小型潜水艇のようなサブマリモン。アルマジモンのアーマー体デジモンの後ろをついてきた水中型アーマー体デジモンたちが加速した。

九龍城寨保護区の北側、高台にある湖は海かと思うほど広い。その湖面、中央から南側にかけてに不揃いな間隔でダークタワーの先端が突き出ている。それが岸に近い方から傾き、沈み行き始めた。伊織のデジモンたちが攻撃を開始したのだ。

もうすっかり暗くなった東京湾に突き出たダークタワーは空中からの攻撃で寸断されていった。芝浦を中心とした地上にも数十本のダークタワーが出ていたが、同様の攻撃で数分とかわからずに破壊されていく。攻撃の主は翼を持つスフィンクスのようなネフェルティモンと、鋼の翼を四足獣の頭部につけたようなデジモン、ホークモンが進化したホルスモンだ。ホルスモンは四体。テイルモンが進化したネフェルティモンにはヒカリが、ホルスモンたちには京とその兄、二人の姉が乗っていた。

「終わったら一旦撤収しまーす！」

京の声で一同は泉研究上屋上へ引き返していった。

九龍城寨保護区の北の湖のダークタワーが全て根本から碎かれ水没し、岸にサブマリモンが上がってきた。他の水中型アーマー体デジモンたちは水路で保護区へ向かう。その方向の上空から翼のある馬のようなペガスモンが舞い降りてくる。パタモンが進化したアーマー体デジモンで、それにはタケルが乗っていた。「砦に近いのは全部処理したよ。残りは大輔たちに任せて僕たちは次に行こう」

「みんな、あんがとなー！ 九龍城寨に移動してもうひと頑張りだ！」

アラモ砦前で大輔がアーマー体デジモンたちに声をかけた。

「ここはもうマイケルたちのデジモンが進化できる」

賢とワームモンもいる。

「あちらのダークタワーを始末したらすぐに戻ってくる」

頭上の塔からマイケルが声をかけた。

「ミミさんはもう出ていったそうですよ」

砦の南方の密林。パルモンとミミが風のように早く移動している。

パルモンの指先の触手はかなり長く伸びる。木の枝を掴むと同時に縮めると、前に進む。同時に逆の触手を伸ばす。その繰り返しがかんりの速さになる。

草や木の根で平坦なところなどない密林で、地表を歩いてはこれほどの速度は出せないだろう。空中を飛ぶよりも早いかもしれない。

ミミはパルモンにぶら下がっていた。その速さでありながらミミは地上のデジモンを見逃さなかった。中には黒い歯車に取り憑かれたデジモンが残っているかもしれない。实际いたのだが、それはもう密林を出るあたりだった。

パルモンはすぐさまトゲモンに進化し、体表の針を飛ばしてそのデジモンについている歯車を破壊した。

「兄弟のパートナーデジモンが同じか違うかは、面白い問題だね」

療養所のラウンジで見回しながら言う城戸シンの前にはゴマモンが三体、仲良さそうにしている。開いたままの大きなガラス戸の外の暗闇から、断続的に光と何か壊れる音が響いてくるのを聞きながらシユウが答えた。

「その辺の問題も泉研究所で扱おうとしてるみたいだよ。でもなかなかそっち方面には手が回らないみたいで」

「あそこはもつと電子系な研究がメインだもんねえ」
丈も続けた。

城戸三兄弟のパートナーデジモンはどれもポケモンから始まり、ゴマモンに進化している。先にパートナーを得た丈の影響なのかと思われたがその先の進化は違った。いまコドクグモンを抱いてる本宮ジュンの弟の大輔はブイモン、と違うデジモンがパートナーだ。

ガラス戸の外から羽音と、土を掘る音が近づいてきた。タケルを乗せたペガモンが着地する。

「だいたい片付きましたよ」

兄弟で違うデジモンといえば、八神太一、ヒカリの兄妹、ヤマトとタケルの兄弟も違う。

外で待っていた伊織の前の地面が盛り上がり、ドリルのような口を持つ硬質なデジモン、デイグモンが現れた。すぐに進化を解いて、アルマジモンに戻る。

「この辺は数が多くなかったぎゃあ」

療養所付近にもダークタワーが生えてきてたのだが、二体のデジモンで素早く処理してしまったのだ。

三体のゴマモンが前に出て代わる代わる喋る。

「よおし、じゃあ、おいらたちの出番だな」

「二人は休んでてよ」

「冷たいお茶もあるよ」

他人から見ると区別がつかないのだが、城戸兄弟が自分のパートナーデジモンを見間違えることはないという。

「ま、伊織は休んで」

タケルが伊織に言った。

「僕たちは研究所に戻らなきゃ」

ペガスモンも進化を解いてパタモンに戻り、タケルの頭に乗っている。

「大丈夫ですか、その」

伊織が口ごもる。タケルと伊織、二人が一緒になければジョグレス進化ができないのだがそれでもいいのか、心配してるのだ。他のジョグレス進化の組み合わせ、大輔と賢、ヒカリと京は同じ場所にいる。

「行くのは僕たちだけじゃないから」

タケルがにっこりと答えた。

後にルイが誰にとはなくこう聞いたことがある。

「タケルさん。どうしていつもあんなに穏やかなんでしょう」

「たまたまその時いたのが伊織と賢、京だった。」

「さあねー、でも子供の頃には結構ブチ切れたこともあったって聞いたわよ。」

「ね、伊織くん、一乗寺くん」

「あ、あのそれは」

「ええと、その」

「怒ると怖いんだって？」

伊織はかすかに胸騒ぎを覚えた。それがタケル本人に対する不安からではなく、彼が向かう先の相手への憐憫だと気がついたのはもつと後のことだった。

九龍城寨保護区あたりも薄暗くなってきた。

砦の西に向いた屋根の上に太一、アグモンとヤマト、ガブモンがいて外を見下ろしていた。いや、太一は仰向けに寝転がっている。

「そろそろだぞ」

周囲のダークタワーが一掃されていくのを見ていたヤマトが言った。聞いた太一がぐい、っと起き上がる。

「やっと出番ってわけだ」

夕陽の底から黒い塊が湧き上がり、こちらに向かってきた。

アラモ砦保護区はまだ真昼だ。密林の先、岩山を越えたと広大な平野が広がり、その先の彼方に巨木が立っていた。直径だけでも数キロメートルはある。そびえ立つ半ばに雲が何層にもあり、頂点は霞んで見えない。

その巨木が、ゆっくりと傾きつつある。

手前の岩山に登ったミミが指差した。

「あれよ、トゲモン！」

下のデジモンたちに取り憑いた黒い歯車を除去し終わったトゲモンがミミに並んだ。

二人の奥で斜めになっていく巨木。その根本に黒い雲が湧き上がっている。いや、雲ではない。黒い輪郭が広がりながら崩れていく。細かい粒の集合体だったとわかる。今度は黒い歯車ではなかった。デジモンだ。それぞれが成熟期、完全体などの黒いデジモンたちだ。

それが数百万もの群れとなつて雲のように見えていた。地面から湧き上がりこちらに近づいてきている。いやその地面にも黒いものが広がる。飛べないタイプの黒いデジモンたちだ。

「さすがにわたし一人で相手にはちよつと多いわね」

「まあね。そんな無駄なことするために来たんじゃないし」

それより、と背後の密林に振り返った。

「この森のデジモンたちに、早く逃げるように言って」

「わかった！」

トゲモンは森へ駆け込んだ。

大輔が周囲を確認してから叫んだ。

「全部終わったな！ 撤収だ！」

九龍城寨周囲に林立していたダークタワーは全て粉碎していた。砦一階の通信室の窓から外に持ち出したモニタを武之内空が支えている。賢がそこにゲートを開き、プッチーモンを先頭にした飛翔型アーマー体デジモンたちが飛び込んでいく。大輔の乗るライドラモンを先頭にした地上型のアーマー体たちが続いた。最後に残った賢がゲートに入る前に夕陽の方に向いた。

「なんとか間に合いましたね」

夕陽はすでに黒いデジモンの群れに覆われて見えなくなっている。地平線いっぱいには広がるデジモンがぐんぐんと近づいてきていた。

「おつかれさまでした。デジモンたちも無傷で返せるわね」

空が微笑んだ。

「でも、さっきのデジモンたちとそのパートナーたちは喜んでましたよ。戦うことじゃなくてもみんなの役に立てるって」

「そうね。彼らが戦うようなことにならないままにしないとね」

賢がゲートに消えた。砦の屋上には太一、ヤマトだけでなく香港の三兄弟、中国の月紅（ユエホン）、ベトナムのデイエン、インドのミーナほか、戦闘経験のあるPHたちとそのパートナーデジモンが夕陽の方向に向かって立っていた。